

「三つの対話的实践」の視点でのリフレクション分析研究

——英語科の模擬授業実習経験に自己の成長を見出すことを目的として——

中 島 義 和

A Study on Reflection Analysis from the Perspectives of “Three Dialogic Practices”

——To Find Personal Growth in the Experiences of Teaching English——

Yoshikazu NAKASHIMA

Abstract

In the final session of the English Teaching Methods course for prospective English teachers, a narrative reflection was conducted focusing on the mock teaching practice experiences. The purpose of the reflection was for the students to find their personal growth in the experiences. The words expressed as a narrative of the self were transcribed into writing to visualize the growth of the self. In this study, I focused on the words and analyzed them from the perspectives of finding out what was acquired from the class experiences and what was the key to growth. In addition, I made meanings from the perspectives of Sato's (2003 et al.) “Three Dialogic Practices,” or dialogues with the “objects,” the “others,” and the “self.” The results suggest that diverse practical experiences, having perspectives as a teacher and ideal images, a sense of self-transformation, and encounters and interactions with different things and people contribute to the promotion of growth.

キーワード：「三つの対話的实践」： “Three Dialogic Practices”，リフレクション：Reflection, 成長の可視化：Visualization of Growth, 教員養成：Teacher Training

1. 問題と目的

1.1 問題

筆者が担当する英語科教員志望学生の中には自分自身に自信を持てず、自己肯定感が低い傾向にある者が多い。これは英語科教員志望学生に限られたことではないが、英語科の場合は特に英語という外国語での授業が求められているため、そのハードルをなお一層高めている現状がある。英語を比較的流暢に話す、全ての授業を英語で行うコースにいる学生の中には、日本の中学校や高等学校で教える英文法に自信を持ってないということを相談してくる学生も少なく

ない。全学的にも、授業内外での学修や活動を通して、学生に成長を実感させ、自信に変えることを目指すことが示されており、学生に自信を持たせ、自己肯定感を高めるコンテンツの構想と実践を大きな課題と捉えた。

1.2 目 的

前述の現状をふまえ、教育実習に臨む前に、英語科教員志望学生が英語科の模擬授業実習での経験を通して、自己に教員としての自信を持つきっかけとなることが何かできないかと考え、自身の成長の可視化に焦点を当ててリフレクションを試みるに至った。英語科教育について教育実習前の総括的科目と位置付けられる英語科教育法Ⅳの最終回の授業において、学生は模擬授業実習での経験に焦点を当てて語りでのリフレクションを行った。そこで表出した言葉を文字に起こし可視化することで、自己の成長を認識する機会とした。このように、語りと文字化による二段階のリフレクションを行った理由は、語りの言葉として準備なく即興的に無意識に表出される言葉とそこに込められた思いの部分を大切にしたいと文字起こしを通して客観的に自己の語りを捉える機会を提供したかったことである。「書く」リフレクションは、整理してまとめやすいという利点はあるが、時として本音を「きれいに」飾ってまとめてしまうことがある。あえて「語る」リフレクションを行い、それを後で文字化させることで「無意識に、本音で」語っていた部分にも注目させたいと考えたのである。

本研究の目的は、こうして学生が紡いだ言葉に見出される成長や学びを捉えた部分に着目し、リフレクションにより深い意味づけや価値づけを行う方法を探究することである。その一つの手立てとして、リフレクションを「対話」と捉え、そこで生み出される多様な言葉を、佐藤(2003・2010・2014)による「三つの対話的实践」の考え方に依拠して検討することを試みる。

2. 援 用 概 念

2.1 援用概念：「三つの対話的实践」

佐藤(2003他)は、「三つの対話的实践」として、以下を説明している。

- | |
|-------------------------------------|
| ①対象との出会いと対話：文化的・認知的実践としての〈世界づくり〉の学び |
| ②他者との出会いと対話：社会的・政治的実践としての〈仲間づくり〉の学び |
| ③自己との出会いと対話：実存的・倫理的実践としての〈自分づくり〉の学び |

学びはこれらの三つの対象との出会いと対話、すなわちこの「三つの対話的实践」を通して創出される学びの統合であるとした。そして、この三つの次元は切り離せない関係(〈学びの三

位一体説))にあると言い、学びは「三つの対話的实践」による「意味と関係の編み直し (retexturing meaning and relations)」とその「再文脈化 (re-contextualization)」であるとしている。

2.2 本研究における定義

本研究では、この「三つの対話的实践」の概念により、学生のリフレクションを検討する。リフレクションを「成長」という学びを創出する自己内対話（自己内の対話・自己との対話）と考え、「対象」、「他者」、「自己」を以下のように捉えるものとする。

対象：模擬授業実践に関わるあらゆる内容、例えば教材や教具、授業そのもの等 他者：クラスメイト（生徒役や協働者）、教師、将来自分が担当するだろう生徒 自己：リフレクションで紡ぎ出される言葉やそこに表出される自分自身・自己

2.3 本概念援用の理由

「対話」の概念は、教育において重要な価値であり、欠かすことができないものであると考える。本研究においては、筆者（教員）が学生のリフレクションに見出された言葉を「三つの対話的实践」の要素と関連づけながら、「編み直す」営みが有効であるのかを検討する。同時に、学生がそのプロセスを実践することが可能であるのかを検討する目的もある。本研究の対象者である学生は教員志望者であり、将来的には本プロセスを活用して、「対話」的概念への意識を持ち、多様な「対話」の捉えを経験してほしいという願いから、「三つの対話的实践」を援用することとした。

3. 研究内容

3.1 対象

私立女子大学「英語科教育法Ⅳ」履修学生 3年生7名

倫理審査・倫理的配慮に関しては、広島女学院大学倫理審査委員会による審査を経ており、研究対象者には事前に説明を行い、同意を得て実施している。

なお、研究対象となる科目「英語科教育法Ⅳ」では、一人3回ずつ模擬授業実習として英語科の授業を行う機会を設け、毎回の授業終了後には、リフレクションシートに振り返りや学びを整理する課題を与えた。模擬授業実施回では、自己・相互評価、相互フィードバック、意見交流、教師によるフィードバックを行った。

3.2 方 法

本研究は、中島（2023a）での発表内容を基礎研究とする。分析対象としては、授業最終回で実施した語りでのリフレクションに焦点化する。学生が模擬授業実習での経験から自己の成長を語ったリフレクションを学生自らが文字化して作成したトランスクリプト（5名分抽出）を分析する。

分析方法は、トランスクリプトから成長と捉えられる部分を抽出し、コーディングおよびカテゴリー化を行う。そして、学生の成長を誘発・促進する可能性がある要素を検討する。また、「三つの対話的実践」の要素である「対象」「他者」「自己」との関連もあわせて検討する。

4. 結 果

4.1 「英語科教育法Ⅳ」の授業受講前後の変化に関する質問紙調査結果

「英語科教育法Ⅳ」の授業受講前と比べて、履修終了後の状況を問うたところ表1の結果が得られた。

表1 「英語科教育法Ⅳ」受講後の状況

Q1	英語を読む力がついた	3.57
Q2	英語を書く力がついた	3.71
Q3	英語を話す（やりとり）力がついた	4.00
Q4	英語を話す（発表）力がついた	4.14
Q5	英語を聞く力がついた	4.29
Q6	英語の文法力がついた	4.00
Q7	英語の語彙力がついた	3.71
Q8	英語教育的視点をもつことができるようになった	4.86
Q9	教材を開発したり研究したりする力がついた	4.43
Q10	授業を構想する力がついた（学習指導案の作成も含め）	4.71
Q11	授業を実践する力がついた	4.57
Q12	他者の授業を観る眼が養われた	5.00
Q13	「問い」を持つ・創る力がついた	4.29
Q14	他者に自分の言いたいことを「伝える」力がついた	4.29

※【5：とてもあてはまる 4：おおむねあてはまる 3：どちらともいえない 2：あまりあてはまらない 1：全くあてはまらない】と設定している。

4.2 語りでのリフレクションの分析結果

学生の語りでのリフレクションのトランスクリプト（5名分抽出）から、授業での経験から「獲得できたもの、成長につながるカギ」に該当すると考えられる記述を抽出し、それらにコーディングを行った。その結果を以下の表2～表6に示す。

表2 Aさんのリフレクションからの抽出と分析結果

対象者	トランスクリプトから抽出した発話	獲得できたもの・成長につながるカギ
Aさん	テンションの使い分けができる教師になりたい	相手の身になって考える視点
	自分が中学生高校生で私の授業を受けたらどう思うだろうって考えた時に最初から最後までテンションの高い授業を受けるのはすごい聞いていて疲れるし、どこで一生懸命活動？勉強してどこで楽しく活動をすればいいのかっていう区別がつかないなと気づくことができました	
	みんなに向けた授業ができる教師	考えて、実践してみる視点
	どうやったらみんなに向けた授業が行えるかなって考えた時にみんなの目を見ながら話したり机間指導でなるべくその授業内で話さなかったっていうか反応がなかった生徒に特に気を配りながら机間指導を行うであったりの努力をしたら一人一人に向けた授業はできると感じる事ができた	

表3 Bさんのリフレクションからの抽出と分析結果

対象者	トランスクリプトから抽出した発話	獲得できたもの・成長につながるカギ
Bさん	自分の中で位置づける英語っていうものがすごく変わった	価値観の変化
	この授業での先生の実験の話だったり、最近の指導、英語の指導要領変わったことによる教育の変化ってものを知って行くうちに、自分が理想としている形に少しずつ、学校の英語も自分の中の英語も進化してきたな	
	前向きに捉えて、じゃあどういう風に英語を教えるかっていうのをすごい考えさせられるきっかけ	考えるきっかけ、多様なものを取り入れる視点
	自分でなんとなく構成を考えた後に友達に聞いてみたりとか、YouTubeで教えている先生またYouTuberの動画を見ながら、ああこんな風に教えたらいんだなっていうのを、いろんなところからアドバイスや情報を取り入れてできた	
	より積極的に文法に対して向き合うことができた	理想を目指す視点
	私が求めている英語っていうのが、英語を学ぶための英語というよりもツールとしての英語だったので、3回目の模擬授業でそれが濃く出たんじゃないかな	
	ただ受験のための英語じゃないんだよっていう、実用的・実践的な英語っていうその理想的な形にちょっとずつ近づけていけるような授業をしていきたい	

この9月からこの1月まですごく私変わったと自分自身で思っています	自分自身の変化 (苦手なもの とらえ方の変化)
自分のためじゃなくて誰かのため、将来の大人になる子供たちの為を思っていると、意外と苦じゃないなって思いました。やはり自分のためだけにやるのと誰かのためにやるのってまたモチベーションが全然違うし、それによる自分へのいい影響っていうのも全然違うなって	

表4 Cさんのリフレクションからの抽出と分析結果

対象者	トランスクリプトから抽出した発話	獲得できたもの・成長につながるカギ
Cさん	教師としての振る舞い方	苦手の克服と課題の変容
	2回3回と模擬授業の回数を重ねていく中で、ある程度はできるようになったかなっていうふうには思っていて、一番最初は前に立つこと自体、人前に立っていること自体が緊張していたんですけど、3回目あたりになると、授業の内容に関して緊張してしまうように	
	授業作りを考える基礎を学べたな	他者との協働から学ぶ視点
	誰かに教えてもらうだけでなくこうやってみんなで意見を出し合いながら、授業自分もして、見直してて、自分が授業したり受けたりするっていうのを、通して、	
	みんなの授業、とても面白いと思う。面白いなというか、自分にはない考えだな	
	その活動の中でどういうふうに4技能を入れていこうとか、どうやったら評価ができるのか考えていて、本当に授業1回1回が私にとって新しい発見の連続というか、本当に自分が実習に行く前に、そういういろんな授業のあり方を通してできる学習の仕方の広さっていうのを知れたかなあ	自由に学びを創り出す視点
	自由にしていよいよって言われたことが、最初すごくびっくり	
何かこう、私は単元とか、本文というのがあって、そこで学ぶ文法っていうのがもう決められていてそれはどうやってやっていくかみたいなことを考えるのが普通になってしまっていたので、そういう自由な中で、何かを学ぶ英語を通して活動を通して英語を学んでいくっていうのがすごくおもしろい。難しかったんですけど面白くて	・自己の課題の再認識 ・状況を見通す視点	
やっぱりコミュニケーションが苦手だな		
コミュニケーション実際現場でも、チームティーチングとかあったりすると思うので、そういうときに率先して、情報の共有をしたりだとか、自分の意見、自分の考えを発信するっていうことだったり、人との距離感っていうのを、もう少しいろいろと円滑に進めていく上では、学校の中でも必要なことだと思うのでこういうところはコミュニケーションっていうのは、私の課題、大きな課題かなというふうには個人的に思ってます		

情報知識を蓄えて、自分の中で噛み砕いて吟味して	<ul style="list-style-type: none"> ・教師としての信念の萌芽 ・理想の授業像の構築
<p>いろんな考えを持って深めていく中の楽しさみたいなものを、目の前の生徒たちと一緒に授業の中で、作っていきけるような、活動を授業作りをできたら、理想だなというふうには思っていて、簡単ではないことだと思うんですけど。いろいろな物事の本当の楽しさみたいなものを、伝えられ、英語を通して伝えられたらいいのかなあ</p>	

表5 Dさんのリフレクションからの抽出と分析結果

対象者	トランスクリプトから抽出した発話	獲得できたもの・成長につながるカギ
Dさん	自信のなさはちょっと改善	<ul style="list-style-type: none"> ・自己の長所を生かす経験 ・達成感と満足感
	間接的に教える伝え方は少し意識したのでそういった面ではちょっと自信のなさっていうのを改善できたのかな	
	チームティーチングでは、自分の苦手な部分と長所を活かして時間配分とかもうまくできたかなという風に思います。1回目と比べたらもう全然自分の自信のなさとかも、なくなってできたのですごく最後は良い授業ができたんじゃないかなというふうに思ったのと、あと楽しいって思わせることができたので良い活動ができた	
	もっとたくさん積極的に行動して経験や体験を積んでいきたいな	<ul style="list-style-type: none"> ・子どものためを思うよりよい授業づくりの姿勢と努力 ・理想の授業像の構築
	考えるのも楽しかったし、すごく生徒のためを思ってみたいな感じとか、こうやったら楽しいんじゃないかなっていうことを想像するのがすごく楽しかった	
	文法のところはもっと自分の英語力とかを磨いていかないといけないなっていうふうに思った	
	英語を話すことが楽しいと思わせたいので英語を話す、自分が生徒にインプットを与えて、アウトプットも、アウトプットの活動も取り入れたいな	
社会に出た時に教員じゃなくても信頼される人になりたい	人としての成長という視点	
すごく今回の模擬授業で、楽しい授業だけでなくメリハリをつけることは、どこにいても重要なことだと思うので、そういった部分を磨いていきたいな		

表6 Eさんのリフレクションからの抽出と分析結果

対象者	トランスクリプトから抽出した発話	獲得できたもの・成長につながるカギ
Eさん	自分が理想とした教師っていう仕事はとても難しくて、でもすごいやりがいのある職業だな	教職への尊敬・やりがい
	人にわかりやすい、わかりやすく伝えるっていうことに対してとても尊敬できるな	

<p>自分が思い描いていた教師っていう仕事はまだ程遠いけど成長できる職業っていうのはすごい実感</p>	
<p>授業をする側としての考え方の変化</p>	
<p>実際、他の人の模擬授業を受けてみてこの視点（「もし自分が授業を受けるなら」）をずっと持ちながら受けたんですけど、自分が生徒だったらこれはわかりづらいだろうとか、これだと動機づけがちょっと低くなってしまいうんていうことは人の授業を見て、自分も気をつけよう</p>	<p>・教師としての視点の萌芽 ・生徒の立場から授業を考える視点</p>
<p>行動変化としては、まずメモを取るようになりました</p>	
<p>最後ノートを見返したらブレインストーミングになっていたりとか、これを得た情報からメモを取ってそれを発展させるっていうメモの取り方になっていました</p>	<p>行動面での成長</p>
<p>人を第一印象で決めない</p>	
<p>多分一番教員にとって重要なかなっていうふうに思います</p>	
<p>若干協働っていう活動が苦手で、まず相手を知らなかったのが全く。どういうことができるのかって人伝えに印象を聞いてたので、すごい授業を作るにおいても不安だったんですけど、実際自分がその相手の人と会うようになって、話すようになって相手を知っていく間にこの人ってちゃんと考えを持ってるんだとか、その人から聞いた内容と全然違う印象がどんどんどんどん見れて、また自分からの第一印象としても全然違った人だったので、コミュニケーションとか関わり合っているのはとても大切だな</p>	<p>態度面での成長</p>
<p>第一印象で決めるのではなく、自分から関わってみるっていう行動をするようになりました。この考え方も教師として生徒を知っていくうえで、生徒指導とか授業、そのクラスがどういうクラスなのかっていうのを見て、だれに対してもこの行動の変化であることは大切だと思うので、今後も続けていきたい</p>	
<p>視野が広がる、広がったことと、コミュニケーションの取り方</p>	
<p>いろんな方向で客観的に考えられるようになったりとか、今まで主観的な考えの自分が客観的な視点で物事を見ていくことができるようになって、徐々にですけど結構視野の広がりには自分的にも成長したな</p>	
<p>ペアの子がその提案してくれた内容に対しても「それだったらこういうこともできるしこういうことも学べるし」みたいな感じでどんどん自分から相手に出すようにして言ったら「それもいいね、でも自分はこうがいいな」というコミュニケーションができ始めて、ここからコミュニケーションの成長が見られる</p>	<p>態度面での成長 (視野の広がり、 コミュニケーション)</p>
<p>コミュニケーションを通して相手の意見を尊重して自分の意見を尊重していいものを作っていくコミュニケーション方法を学ぶことができました</p>	
<p>授業中の生徒と教師のちょっとしたスモールトークとかちょっとした会話とかでも徐々に本当に徐々になんですけど会話を発展させることとかができて成長したな</p>	

何かきっかけを与えられるような教師になりたい	理想の教師像の構築
プラスして楽しい授業、生徒が楽しんでいんなことを自分から自発的に挑戦していく視点を持てる授業をして、きっかけを与えられるような教師になりたいな	
先生の模擬授業を見てそれ思ったんですけど、大学生でも楽しめる授業って高校生でも中学生でも楽しめる授業だし年が変わったとしても、楽しめるっていう。楽しむっていう年齢に関係はないなってすごい思って、自分が楽しいと思える授業だったらちゃんと生徒達も楽しいだろうな	
自分の行動の変化とか、視野の広がりとか関わり方とかコミュニケーションを通して、もっと相手をしながら興味を引き出したり挑戦心を高めていけるような教師になりたい	

次に、授業での経験から「獲得できたもの、成長につながるカギ」としてのコーディングで得た22のコード（下位項目）から、4つのカテゴリー（上位項目）を生成した。

そして、22のコード（下位項目）のそれぞれについて、「三つの対話的実践」の視点との関連づけの検討を行った。その結果を以下の表7に示す。

表7 4つのカテゴリー・22のコードと「三つの対話的実践」の関連づけ

カテゴリー	コード		対象	他者	自己
A 経験からの実践的学び	1	考えて、実践してみる視点	○	○	
	2	多様なものを取り入れる視点	○	○	
	3	状況を見通す視点	○		○
	4	他者との協働から学ぶ視点		○	○
	5	自由に学びを創り出す視点	○		○
B 教師としての視点	6	教師としての信念の萌芽		○	○
	7	教師としての視点の萌芽		○	○
	8	教職への尊敬・やりがい	○		○
	9	相手の身になって考える視点		○	○
	10	子どものために思う気持ち		○	○
	11	子どもの立場から授業を考える視点	○	○	
C 自己の変化の実感	12	達成感と満足感	○	○	○
	13	価値観の変化		○	○
	14	苦手なものの捉え方の変化		○	○
	15	苦手克服と課題の変容	○		○

	16	自己の課題の再認識			○
	17	行動面での成長と汎用化		○	○
	18	態度面での成長と教職への適用	○		○
D 理想を描く・探究する視点	19	理想を描き、目指す視点	○		○
	20	理想の授業像の構築	○		○
	21	理想の教師像の構築	○		○
	22	人として認められたい思い		○	○

5. 考 察

5.1 「英語科教育法Ⅳ」に関する質問紙調査結果の考察

「英語科教育法Ⅳ」の授業受講前後の変化に関する質問紙調査結果を示した表1より、Q1～Q7の英語のスキルに関しては、本授業ではそれほど大きな伸びを実感してはいないようである。一方、Q8～Q12の英語教育力に関する質問に対しては、高い数値評価が得られた。ここからは、英語の教育的視点、教材研究力、授業構想力、実践力、観察眼を獲得することができた、あるいは、伸長することができたという成長を実感した様子が示唆される。Q13は、筆者が授業を通して強調していた「問い」をつくる力に関して、Q14は、大学の目標である「伝える力」に関しての質問項目である。ともに8割強の到達であり、概ね満足と捉えられる程度の結果にとどまった。

5.2 語りでのリフレクションの分析結果の考察

4つのカテゴリーそれぞれに示される学びや視点等について、リフレクションでの代表的な発言を一部例示し、考察する。

A：経験からの実践的学び

「どうやったらみんなに向けた授業が行えるかなって考えた時に、みんなの目を見ながら話したり、机間指導でなるべくその授業内で話さなかったっていうか、反応がなかった生徒に特に気を配りながら机間指導を行うであったりの努力をしたら、一人一人に向けた授業はできると感じる事ができた」(A-1)

本リフレクションでは、自身の模擬授業内での試行経験から、授業に活用できる実践的な指

導方法や態度・アイデア等の学び等を獲得できたことを示している。

A のカテゴリでは、以下の経験からの学びを見出すことができると考えられる。

- 模擬授業案を自分で構想し、授業として実践するという試行錯誤の経験
- 他者による模擬授業を生徒役で受けることで得られる経験
- 他者との授業振り返り協議を行うことで得られる経験
- 多様な経験から、授業に活用できる実践的な指導方法や姿勢・アイデア等の学び

B：教師としての視点

「いろんな考えを持って深めていく中の楽しさみたいなものを、目の前の生徒たちと一緒に授業の中で作っていきけるような活動を、授業作りをできたら理想だなというふうには思っています」(B-7, B-11, D-20)

本リフレクションでは、自身を教師の立場に置き、生徒を視野に入れた発言を見出すことができる。この発言のようにカテゴリ B と D では分類が重複するものも見られる。

B のカテゴリでは、以下の成長・変容を見出すことができると考えられる。

- 模擬授業の経験に比例する生徒への強い意識
- 教師としての立場への意識・自覚
- 教育者として、子どもを思う視点
- 教職そのものへの意識の変化

C：自己の変化の実感

「若干協働っていう活動が苦手で、まず相手を知らなかったのが、全く。…人伝えに印象を聞いてたので、すごい授業を作るにおいても不安だったんですけど、実際自分がその相手の人と会うようになって、話すようになって、相手を知っていく間に、人から聞いた内容と全然違う印象がどんどんどんどん見れて、…コミュニケーションとか関わり合っているのはとても大切だな」(C-13, C-14, C-17)

本リフレクションからは、模擬授業での協働経験がきっかけとなり、他者とのつき合い方にプラスの変化が生じていることとコミュニケーションの重要性を実感として持てたことが示されている。

C のカテゴリでは、以下の成長・変容を見出すことができると考えられる。

- 模擬授業での成功体験
- 他者からの高評価
- 授業のコツをつかむ瞬間
- 苦手や不得意なもの・こと・人の克服経験
- 自己の短所や課題の認識（「鏡」としての他者：他者との関わりや他者のふるまいを通して自身を見つめる）
- 自身の心持ち・気持ち，態度，行動の変容と成長
- 教師を目指すうえで重要なことへの気づき
- 子どもたちに教師として実感をもって伝えるという意識

D：理想を描く・探究する視点

「自分の行動の変化とか，視野の広がりとか関わり方とかコミュニケーションを通して，もっと相手を知りながら興味を引き出したり挑戦心を仰いだりするような教師になりたい（D-21）」

このリフレクションでは，模擬授業での経験から学んだことや得られたことを総括的に示しつつ，自分の理想の教師や授業のイメージを描いている。

D のカテゴリでは，以下の成長・変容を見出すことができると考えられる。

- 教育実習や実際に教師になった際の展望
- 「もっとこうしたい」「こういう授業をしたい」「こんな教師になりたい」という理想像
- 教師としての信念・ビリーフの芽生え
- 教師であるとともに一人の社会人として，人間としてのあり様

5.3 語りでのリフレクションの「三つの対話的实践」との関連に関する考察

次に，4つのカテゴリ（22のコード）に見出される学びや経験等と「三つの対話的实践」の主要素の関連を検討する（表8）。「対象」に関しては，主に対象世界である教材や授業づくり，生徒とともに創り出す授業そのものを，「他者」に関しては，生徒やクラスメイト，教師といった他者からの影響や他者との相互作用による経験を，「自己」に関しては，一連の経験を通して見出される自分自身の課題や変容，成長等，自己と向き合う経験を，それぞれの出会いや対話の対象と考える。

表8 4つのカテゴリー・学びや経験・関連する「三つの対話的実践」の主要素

カテゴリー	学びや経験	関連する「三つの対話的実践」の主要素
A 経験からの実践的学び	授業づくりや教材研究で対象と向き合う経験、授業デリバリーでの実践的経験、生徒との相互作用の経験、授業に活用できる実践的な指導方法や態度・アイデア等の学び	対象・他者
B 教師としての視点	生徒の存在を意識した教師としての自己のふるまいやあり方の経験	他者・自己
C 自己の変化の実感	異なる多様な他者・ものや価値観との出会い・交流による自己変容の経験	他者・自己
D 理想を描く・探究する視点	理想の教師や授業のイメージを持ったり描いたりする経験	対象・自己

カテゴリーA「経験からの実践的学び」では、「対象」・「他者」・「自己」との関連がほぼバランスよく見られた。これは、経験からの実践的な学びの創出の要素として、「対象」・「他者」・「自己」のいずれもが重要な要因となっていることが考えられる。

カテゴリーB「教師としての視点」では、主に「他者」・「自己」との関連が見られた。教師としての視点の創出には、模擬授業実習での生徒役のクラスメイトやフィードバックを与えた教師（筆者）との関わりが大きく影響していることや、その関わりを通して将来の生徒に思いを寄せる自己を認識したり、教師としての自己のあり様を見つめたりする機会が多く得られたことが考えられる。

カテゴリーC「自己の変化の実感」でも、主に「他者」・「自己」との関連が見られた。自己の変化に直接的・間接的問わず影響を及ぼしたのは、他者（事物）との接触・交流であろう。多様な他者・事物や価値観との接触・交流やそれらと自己との比較や対照を通して、自身の変容を実感する機会が得られたものと考えられる。

カテゴリーD「理想を描く・探究する視点」では、主に「対象」・「自己」との関連が見出された。対象世界である教材や授業への考え方、「教材観」「指導観」といったものについての自分なりの理想像や探究の姿や、それを通したなりたい教師としての自己像を描く姿の創出につながったものと考えられる。

以上に示してきたように、リフレクションに表出された発話から、学生の成長を誘発・促進する要素として全てに共通するものは経験であると考えられる。カテゴリーAで見出される多様な経験や、カテゴリーCで示される苦手であったり、自分とは異なったりする多様な他者・ものや価値観との出会い・交流という経験もまた、学生の思考や行動面・態度面に変容をもたらし、成長へと導く可能性がある。また、教師としての視点・立場から物事を見たり考えたりする経験も成長につながる重要な糧となり得る。

5.4 語りを自ら文字化するリフレクションの意義に関する考察

最後に、語りでのリフレクションを自分で文字化する実践に関して考察する。学生のコメントから該当する部分を以下に示す。

- ・こんなに成長した点があったんだ
- ・成長したことを自分が実感できていたことに気づけた
- ・できることが初めに比べてめちゃくちゃ増えていた
- ・少しずつでも人は成長するのだな
- ・自分の成長を知るよい機会になった
- ・教育実習にちょっと自信をもって行けそうな気がしてきた
- ・書いて振り返るとよいことを書いてしまいそうだけど、結構本音で語れてた

これらのコメントより、「成長実感」「成長の可視化」「自信」「本音」のキーワードが見出されたことから、本実践のねらいはある程度達成したと考えられる。

6. 成果と課題

6.1 成 果

学生は、自分の言葉で即興的に「語る」、それを自らが文字として表す可視化の実践により、その「対話的实践」をより深いものに行っていると考えられる。リフレクションを通してそれぞれの領域との多様な「対話的实践」を暗黙的に実践する営みは、自己の成長を認識する効果的な方法であることが本研究から考えられる。

また、「三つの対話的实践」の視点の活用は、教職志望の学生にとって、「対話」を意識するきっかけともなり、成長の対象や領域を分類的に実感するうえで、一つの指標になる可能性も示唆された。本研究での試行を活用し、学生自身に自らの経験や学びを「編み直す」実践の機会を提供する意義、すなわち、「成長実感」の可視化を目的としたリフレクションの枠組みづくりにつながる可能性が見出されことは成果である。

6.2 課 題

本研究の対象は、英語科教育法の模擬授業実習という限定的な経験を切り取るリフレクションにすぎない。今後はより多様な対象を詳細に検討する必要がある、課題であると言える。勤務校・他大学での教育実習事前指導、教職実践演習科目、他教科・他校種でのより多様な対象を詳細に検討することが求められる。あわせて、英語科教育法の模擬授業経験からの成長実感

によって得られた「自信」が実際の教育実習を経て、あるいは、現場に出て（教員になって）どのように変容するのかについての検討も必須であろう。英語科教育法の授業で獲得し、可視化した「自信」について、以下の3点を見出したいと考える。

- ①「自信」は教育実習や現場で増すのか、削がれるのか
- ②「自信」の増減の要因・きっかけは何か
- ③「自信」はどのような人・こと・ものとの相互作用によって変容するのか

（指導教諭、他の教員、児童・生徒の授業内での直接的反応、授業外での間接的反応、他の実習生の授業、他の実習生の反応等）

また、分析の枠組みの妥当性や適切性を検証することができていない点も課題として考えられる。今後は、筆者が他の文脈で分析の枠組みとして活用している Rich Points (M. Agar, 1994・1996；中島, 2018・2023a) の活用も試みる。自己内対話に見出される、経験における異なるものとの接触が、「違和感」「衝突」「対立」「ズレ」「驚き」のようなものを創出することで「差異」を顕在化させ、新たな文化としての学びを生み出す過程・瞬間としての Rich Points を検討したい。

さらに、本実践での成果を応用的に活用し、教師を対象とした授業研究・授業づくりや学級づくりのリフレクションの枠組み・方法の構築の可能性も探究していきたい。

【参 考 文 献】

- 佐藤 学 (2003) 「学びの対話的実践へ」、佐伯 胖・藤田英典・佐藤 学『学びへの誘い』東京大学出版会
- 佐藤 学 (2010) 『教育の方法 (放送大学叢書)』, 左右社
- 佐藤 学 (2014) 「学びにおけるコミュニケーションの構造—対話的実践による学びの共同体へ」『Japanese Journal of Communication Studies』 Vol. 42, 日本コミュニケーション学会
- 中島義和 (2018) 「学級に内在する『異なるもの』との接触により顕在化する「差異」を通した学級文化の生成—M. Agar の『リッチ・ポイント』に着目して—」『東京大学大学院教育学研究科修士論文』
- 中島義和 (2023a) 「教職志望学生による語りでのリフレクションを通した成長の可視化の試み—模擬授業実習での経験を核として—」『日本教師学会 第24回大会 発表要旨集』 pp. 29–30, 自由研究発表 (分科会 D: 教職志望学生の省察と成長) 発表用スライド
- 中島義和 (2023b) 「エスノグラフィーの手法を用いた授業研究の試み—M. Agar による『リッチポイント』の概念を援用して—」『広島女学院大学大学院言語文化論叢』 第26号
- Michael Agar. (1994) *Language Shock: Understanding the culture of conversation*. New York: William Morrow.
- Michael Agar. (1996) *The Professional stranger: An informal introduction to ethnography* (2nd ed.). New York: Academic Press.